
ナイトオブナイト

エターナルグレードツー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトオブナイト

【Nコード】

N7991X

【作者名】

エターナルグレードツ

【あらすじ】

とある星の広大な海に浮かぶ四つの大陸の内、一番最初にできた大陸、通称魔法大陸。

この大陸の辺境で今、絶滅の危機に瀕した種族が一つ。

ドラキュラ。

吸血鬼系魔族の最高位に属する種族である。

今、ドラキュラは虐殺にも似た行為に侵されていた。

これは、たった一人生き残ったドラキュラの少年ナイトの物語。

故郷にて（前書き）

『ドラキュラ』

吸血鬼系魔族では、ランク『煉獄』に属する種族。

ここ、魔法大陸には、大きく分けて、二つの種族が存在する。

一つは、俗に人間と呼ばれる種族。

人間は主に魔術を用いる。魔法と魔術の違いは、一つ。人間に扱えるか否か。

故に、この大陸では、魔法使いは既に人ではなく、魔族に属する。

もう一つ、絶対的個数は少ないものの、この地に生まれ出る時より、その身に魔を司る種族、魔族。

生まれ落ちた時から、魔をその身に宿しているせい、人間とは、異なった外見を持つ者が多い。

その他にも、人が霊体として、永くこの世に留まったが故に、成る精霊や人間と魔族の混血である魔人などの種族も存在するが、それはまた後程…

故郷にて

酷く、喉が渴いた。

酷く。

走り続けたせいだ。

アイツから、追われて、傷つけられ、そして、今も追われている。

頭がボーッとする。

最後に血を飲んだのは、ほんの五分前だと、いうのに、俺は酷く喉が渴き、意識が朦朧としている。

血が足りない。

ナイフで深々と斬られれば、出血多量なのは、当たり前だ。

俺の足が、意識とは、裏腹に止まり動かなくなる。縛れて、転び、無様な醜態を、その雪原に示した。

振り返れば、転々と俺の血が軌跡を描いている。

不意に、足音。

前のめりに倒れている俺の前には、『俺』が。

夢でありたいと願いつつも、頭の奥ではわかっている。これは、現実だ、と。

「ううつ・・・」

髪を掴んで起こされた。

当然、成人男性に近い体重を髪の毛だけで支えられる訳もなく、抜けた頭髮が、血のソースをかけた雪のシャーベットに散らばった。

引き起こした当の本人は、狂喜の笑顔を顔に貼り付けて、口を開いた。

「ナイト」

寒気がした。

姿形は俺と同一でも、声は違う。

まるで、その人の本質を表しているかのよう。

「おま・・・え・・・が・・・ッ！」

薄れて行く意識の中、なんとか俺は声を絞り出した。

そうだ、コイツガ郷里の皆を。

我が恩師を、姉を、弟を、爺様を、その手にかけてた。

しかし、今の俺の精神状態と、身体状態は遥かに釣り合わない。もう、ピクリとも、身体を動かせそうにないのだ。

相手もそれを悟ったのか、狂喜の笑顔から、興奮めしたと言わんばかりの凍りついた表情へと、一変した。

「つまらないな、もう、すんでのところまで、来てやがる」

不意に熱。

熱い、酷く熱い。

下腹部を見れば、自分の腹を確かに抉る刃物の姿が。

「また会おう」

引き抜かれた痛みで早々に俺の意識は飛んだ。

最後に見たのは、そう、楽しげに刃物を引き抜く俺の姿と、空中に軌跡を描く血液だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7991x/>

ナイトオブナイト

2011年11月15日02時32分発行